

女性のための情報誌

NETWORK

NO.16

## 目次

特集 明日につなぐ生き方・再考	2
◇女の生き方ウォッチング	4
ウーマンスクランブル	8
静岡の女性 今そして将来	10
グループ紹介	12
国際交流のひろば	13
ねっとわあくらいぶらりい	14
ポプリ	15
ねっとわあく情報、あとがき	16



静岡県

# 明日になく生き方・再考

## 特別寄稿 時の流れは早いから

作家

沖藤典子

めまぐるしい時代の變化の中で、女性の生き方は自由になり、多様化しています。反面、生き方のモデルが見つげにくく先の見えない不安を抱く女性も多いようです。明るい未来を築くために、一人一人の女性が現在をどう生きるかが問われています。

今、自分の生き方を見つめ直し、将来に向けて小さな一歩を踏み出すチャンスです。

明日になく自分らしい生き方を考えてみませんか。

お正月、ニューヨークに住んでいる上の娘から電話がかかってきた。「やーやー、わたしも今年は三十になるわ」

へえ、驚いた。なんとあいつが三十歳。

いきなり自分のトシを披歴するのも気恥ずかしいことだが、三十年前わたしは二十二歳だった。つくづく、若かったなあと思う。自分ではいっぱしのつもりでいたけれど、今にして思えば赤面することばかり。未熟が洋服着て、そのちくはぐさにも気づかずに歩いていたようなものだ。生意気で怖いもの知らず。だからこそやって来られた部分もあるが、随分と人様には迷惑をかけ、恥を重ねて生きてきた。なんと早かった三十年。

三十年後、わたしは八十二歳になる。八十二歳かあ。どんなおばあさんになるのだろう。

ただ一つ確実なことは、これからの三十年も、かつての三十年と同じように、またたく間に過ぎてしまうだろうということ。我ながら八十二であることに驚き、信じられないでいるに違いない。体力の衰えは別にしても。

友人の中には、あんたあと三十年も生きるつもり？なんぞと驚くものもあるし、確かにわたしも、人間五十を過ぎたら、いつ死んでもおかしくないと思う。娘達にも、死は射程距離内に入った、この母に何があっても嘆くなど、言い合めてはある。

しかし、命の終わりの覚悟とは別に、一応はあと三十年をどう生

きるか、どういうおばあさんになっていくか、このことも考えておかなければならないと思う。このまた、あつという間に過ぎてしまいうに違いな時間の重みを、きつちりと心に刻みたい。

とはいえ、未来はあまりにも漠然としている。社会の変化もいろいろに語られてはいるが、今一つ実感が湧いてこない。三十年後はどんな社会になっているのだろう。

西暦2020年。なんとその年は高齢化がピークに達すると予測されている年である。大量のお年寄り。無事生き延びていけば、わたしもその中の一人として、寝たきり適齢期、痴呆性適齢期を迎えている。

その時、わたしは不安なく老いを生きているだろうか。万一そう





●プロフィール

沖藤典子

1938年 北海道生まれ

1961年 北海道大学文学部哲学科  
心理学教室卒

(株)日本リサーチ・センター  
調査研究部入社

1976年 退職

その後、立教大学非常勤講師などを経て、現在、婦人問題や福祉に関するノンフィクションを多数執筆している。

主な著書

女が職場を去る日

銀の園・ちちははの群像

不安なれ命の終り-ホスピス病棟からの報告-

女が会社に行きたくない朝

女が職場で悩む時

妻がひそかに決意する時

働きながら親を看る

女と家族の交叉点

老いを設計する

愛をさすらう女たち-精神科医のノートより-

転勤族の妻たち

薄命の作家・素木しづの生涯

老いを看とる-人生80年代の老年学-

女は仕事を通して賢く美しくなる

ジェット娘が結婚する時

女が転機をのり越える時

いう状況になった時、わたしが望む福祉サービスを、受けられる社会になっているだろうか。  
本格的な高齢社会を目前にして、私達を取り組まなければならぬことは、大きく言えば二つあると思う。  
一つは、老いに向けての気構えとも言うべき、緊張感の持続。わたしの場合、子離れは予想以上に苦しいものだった。子供が小さかった頃は、早く大きくなれ自由にしてくれと願っていたのに、いざ下の娘も巣立ってみると、心の支えが抜け落ちて、夫の顔を見た途端うつ病になってしまった。  
中年期以降の夫婦のありよう、とくに家の中のこの男女不平等をどうしてくれよう。八十年代は女の時代と言われたが、九十年代は

夫婦の時代だと思ふ。夫達は依然男社会の特権にあぐらをかいていけるけれど、『壁』崩壊は時間の問題だろう。改めて緊張関係を持ち合う、夫婦の再構築の時代に入った。  
老いの大敵と言われる、退屈と孤独をどう乗り越えるか、これもまた夫婦のありようの延長線上にある。夫も妻も、そして一人になっても、広く社会に目を向けた仲間作り、自己鍛練のための機会作り、つまりは『行動』にむけて自分を奮い立てることが大事なんだと思ふ。そして挫折や失敗を味あい、人からの叱責を受ける。行動しなければ何事も平穩無事だろうけど、人間は挫折を知って初めて、孤独に耐え得るもののような気がする。緊張の持続をいかに計るかは、中年期からの最大課題である

と、わたしも我身を戒めている。  
二つめは、なぜ高齢化社会が女にとつて、危機と感じられているかと言えば、その経済不安、健康不安もさることながら、イ意識のそこはかとなない復活が見えていくからだ。  
イエの中で最下位の地位としての嫁。その嫁の親孝行としての介護。福祉の貧困、終末医療の数々の矛盾が語られる時、代わって出てくるのが、情緒的な家族賛美論である。

生きすればする程、兄弟姉妹の悶着の種、老親もそれを見たくないと自殺に走る。家族から自立した老い、それを支える社会の仕組みが、わたしは欲しい。  
90年代は行動の時代である。中年期からの行動が人生を支える。一人暮らしの女も、働く主婦も、社会活動する主婦も、知恵と手を結び合う時代になった。時間は人々の上に平等に流れている。しかも早いスピードで。  
だからこそ、思い出をたくさん作らなくちゃ、時は茫漠たるものになるに違いない。人生八十年時代は、思い出を作り、楽しむ時代。それが、時を確かなものにすると思っている。

●明日につなぐ生き方・再考

# 女の生き方ウオツチング

自分なりのテーマを見つけ、それぞれの分野でいきいきと活動している女性たちをウオツチングしました。身近な女性の生き方を参考にして、あなたの明日を見つけてみませんか。

できることから始めよう

子供たちに

自立できる場所を

手作りパンの店

「えんぜる」のみなさん

(清水市)



障害を持った子供が大きくなつたとき、授産所、就職先など、社会的な受け皿の少ないことが親にとつて深刻な問題になってきます。子供たちが学校を卒業した後、どこに行つたのか分からない、ちつとも姿を見かけなくなつた：実際そんなことが多いようです。

「子供たちの将来に向けて、何か自分たちの手でできる基盤を作つていきたい。行動を起こすことでまわりの人たちに少しでも理解してもらいたい」とこのように思い、手作りパンの店「えんぜる」がスタートして二年目を迎えました。メンバーを代表して城之内文江さんと水野昌子さんにお話をうかがいました。「ダウン症児の将来を考えると、障害グループのメンバーとして障

害の問題、子供の問題などの勉強を積み重ねてきました。そして自分の子供が大きくなつたときの問題に直面し、ただまわりに働きかけて待つているだけでなく、自分たちでできることを小さくてもいいから始めていこうと思つようになりまし。

そのころ、近所の手づくりパン教室でパンづくりを教わっているうちに店の構想ができ、同時に先生の協力も得られ、店を出すに至つたそうです。

統一しています。このように細かい工夫や配慮がなされています。

昨年初めて特殊学級、養護学校からの実習生二人を受け入れ、ひとつひとつ確実に行動が実現していくようです。

「私たちは、お店を大きくすることよりも、仲間の輪を広げていきたいのです。あちこちにいろんな場所ができれば、子供たちも自分に合った仕事を選べるようになると思うから。また、昔は隔離することが多かったけれど、私たちは子供の存在をもっとみんなに知ってもらいたいのです。そして母親である私たち自身も趣味を持ち、前向きに生きていきたいと思つています。」という言葉に一本芯の通つた力強さを感じました。



若いときに深い体験を

## マラウイの病院で

### 看護婦をして

湊 八重子さん

(浜岡町)



浜岡町の病院で看護婦として働き、保育園に通う男の子二人を育てている湊さんは、海外青年協力隊員として、アフリカのマラウイで過ごした経験があります。そこでの暮らしは、生きる原点を見た思いとして、今も湊さんを揺さぶり続けています。

湊さんは高校生のころ、「仕事をして生きたい」と思っていたので、卒業後は看護学校を出て助産婦と

保健婦の資格を取り、東京で病院勤めをしました。一人娘なので浜岡へ戻ってきたのですが、当時二十六歳。割合保守的な土地柄のせいか、友達はみんな結婚していました。そのころ、ちょうど海外青年協力隊から帰ったばかりの東京の先輩に会いました。その先輩から刺激された湊さんは、二十五倍の競争をくぐり抜け、海外に飛び出したのです。湊さんは、助産婦の仕事の上でも、「日本の管理された出産でなく様々な出産に立ち会いたい、経験や技術を身につけたい」という期待もありました。

派遣されたのはマラウイとモザンビークの国境近くの病院でした。「貧しいし、文化も私の想像でできなかった世界でした。食べる物があれば幸せで、朝太陽が出るとみんな楽しそうに踊るのです。それがお祈りです。道にコーラの瓶のふたが落ちてると大喜びで拾うのを見たときは、不思議に思いました。するとある日、病院で千二百グラムの未熟児が生まれ、お母さんがそのふたで赤ちゃんの口にミルクを注いでいるのです。あのふたは入れ物として商品になるのですね。あの赤ちゃんが無事に育ったことと、そのふたのことも忘れられません。」と、湊さんの日本で

の常識では計りきれないことばかりだったそうです。また、貧富の差や教育の差、母系社会、ユニセフの援助の受け方などにも驚いたということでした。

「けれどもマラウイの人たちは素朴でやさしくて」、「そこでは、人の死があまりに身近でした。でも、私はこの国の一番貧しい地域へ派遣されたので特別かもしれませぬ。他の隊員は全く違う体験をしてきたと言います」さらに、「二十代でいろいろなことを体験できて良かった。高校時代自慢するほどの成績でもなかった私が、外国語で仕事をし、大臣からヒッピーまで本当に様々な人と出会えたのです」と湊さんの話は尽きません。

今、湊さんは夜勤もある仕事です。そして「プロだったら仕事第一にと言う人もいるけれど、私は家庭があるから働くと言いたい。マラウイでは生きる最少の力は家族だどつくづく思ったし、看護婦は人を超えた何者かの愛の代行者だから、気負わずにとも思うのです。」と淡々と語ります。

近ごろ病院で七十歳の患者さんから「鎌は使わないときびる、がんばりな。」と言われたそうです。湊さんはこのとき、「継続は力なり、続けていればこそ見えないものが

見えてくる」と教わったと言います。看護婦という仕事を通して、心から触れ合い励まし合えるつながりを作れるのは、湊さんの人柄なのでしょう。マラウイの体験からなのでしょうか。

夫と共に家業を守る

## 茶の香りの

### 中で生きて

小林みつ江さん

(静岡市)



静岡駅から北西へ、薬科川沿いに車で走って三十分ほど行くと、山と川に囲まれたゆるやかな斜面に茶畑が広がります。ここは、静岡市大原、「本山(ほんやま)茶」